

ガンダーラ彫刻の腕の接合方法

内 記 理

は じ め に

西暦のはじめ頃、ガンダーラは仏像が出現する舞台の1つとなった(図1)。このガンダーラにおける仏教がどのようなものであったかは、古くから仏教を信仰対象としてきた我々にとっても、最も興味深く、また関係深い問題の一つである。ところが、最も雄弁に過去を語る文字資料は、十分に残されていない。その代わりに、発掘された遺構や、発掘出土遺物、あるいは収集された美術品が、当時の文化を復元するための資料として用いられている。特に、彫刻の図像の解釈から、何が崇拜対象とされていたか、あるいは、どの説話が好まれていたか等が、ある程度復元されている[Foucher 1905等]。ここで問題となるのは、これらガンダーラ彫刻が製作された年代である¹⁾。ガンダーラ彫刻は、歴史上のある時点においてのみ作られたのではなく、数世紀に渡って作られ続けた。もしこれらの彫刻を一括して扱ってしまったら、そこから復元される仏教は、数世紀の間におこなわれた仏教が混ざったものになってしまう。当時の仏教がどのようなものであったかを知るためには、ガンダーラ彫刻の年代は整理されておかなければならない。

ガンダーラ彫刻の年代は、その美術様式に基づいて、これまで多くの研究者によって検討されてきた。美術様式の編年研究は、新たな発掘成果や新出資料の公表に合わせて、それ以前の研究の問題点を乗り越える形で、順次更新されており、一定の成果を挙げてきた。ただし、それら新たな資料が公開されることによって、それまでの様式の年代観が逆転する事態が起こっていた点を、我々は見過ごすべきではない。このような事態が引き起こされてきた原因は、主観的な判断に頼らざるをえない様式観によってのみ、彫刻の年代が語られてきたことである。

今後、このような年代観の逆転が起こるのを回避するためには、美術様式とは別の、より客観的な年代の物差しが必要である。このような目的意識のもと、私は本論で、「技術的な側面」から彫刻の年代を検討する。

ガンダーラ片岩彫刻の単独立像においては、多くの場合、身体と腕が別々に作られた。そ

1) ガンダーラにおいて彫刻が大量生産されていたことを鑑みて、本論では敢えて従来の「制作」の用語を用いずに「製作」と表現した。例えば、片岩彫刻は、ラニガト遺跡から総計3069点、タレリ遺跡から3051点、メハサンダ遺跡から1006点出土している。

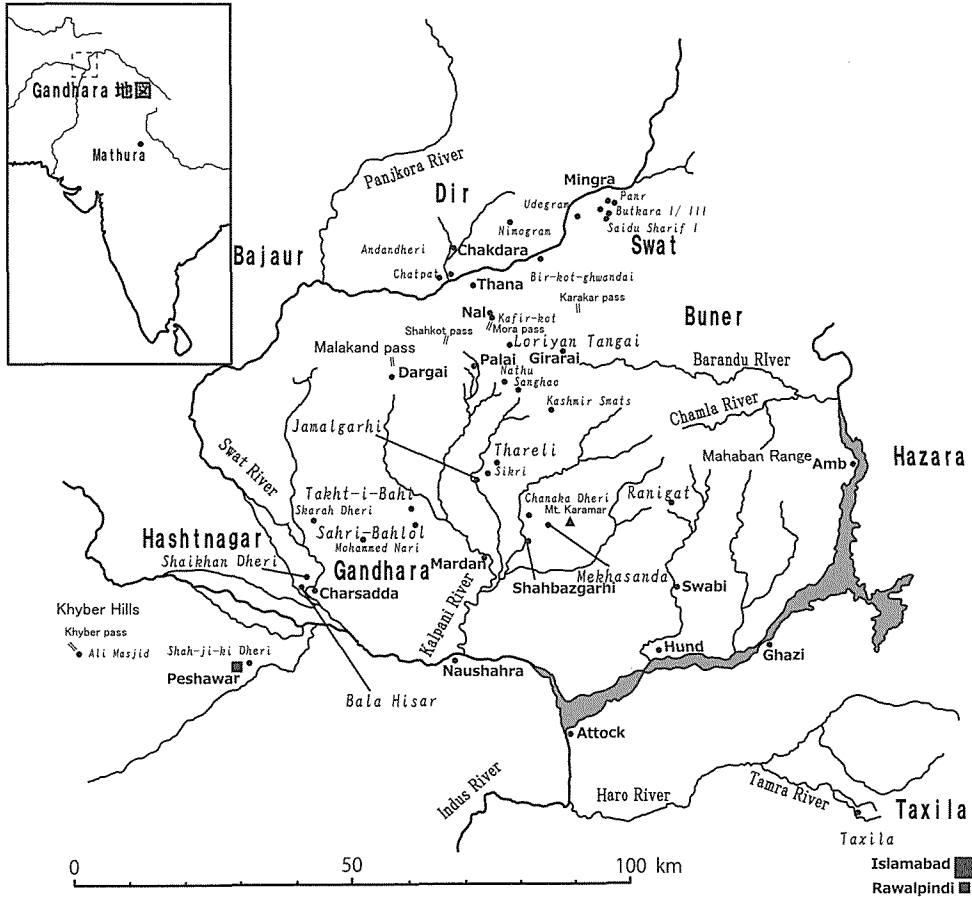


図1 ガンダーラ関係地図

して、身体と腕の接合のために、ガンダーラではいくつかの異なる技術が用いられた。今回、接合痕跡をもつ彫刻を整理し、その出土状況を分析することで、接合方法の出現時期に違いがあることが分かってきた。この接合方法の変化と、美術様式の変化とを照らし合わせることにより、ガンダーラ彫刻史における大きな画期が、ヴァースデーヴァ1世の治世前後、つまり3世紀前半頃に求められることが判明した。

I ガンダーラ彫刻の様式年代研究とその問題点

まずは、ガンダーラ彫刻の年代についての研究史を概観したい。ガンダーラ彫刻の年代は、仏像の出現に影響した文化や、出現した場所の問題とともに、多くの研究者によって議論されてきた。その初期にはA. フーシェが、アレクサンダー大王の東征以後、当地域に残ったギリシア人の支配下において、ヘレニズム文化の影響により仏像が生み出されたと考えた

[Foucher 1922: 443]。しかし、当時、年代の分かっている資料で、最も古く遡りうる仏陀表現は、アフガニスタンのビーマラーン第2ストゥーパから発見された金製舍利容器に表わされたものであった。その年代は、一緒に発見されたアゼス1世の銅貨4枚から、西暦紀元前1世紀中葉頃と考えられていた。そのため、仏像の出現時期を、インド・グreek王国の最盛期を築いたメナンドロス王の時代（紀元前2世紀中葉頃）まで遡らせて考えることができず、暫定的に紀元前1世紀初頭にあてた。この「ギリシア影響説」を受け継いだL. バッハホーファーは、インド・グreek王国時代に遡る仏像が存在しないことから、ギリシア人に続いて当地を支配したサカ王国のアゼス1世の時代、つまり紀元前1世紀半ば頃にガンダーラが繁栄し、仏像が出現したと考えた [Bachhofer 1925: 1-28; 1929: 94-6]。

J. マーシャルも、ヘレニズム文化の影響でガンダーラ美術が発生したと考えた研究者の1人である。しかし、彼の見解は、自身のおこなった発掘の成果に基づいていた点で、前2者のものより説得力をもっていた。マーシャルは、タキシラ地方のシルカップ遺跡の発掘成果を踏まえ、サカ王国時代の後期に地中海風の初期的な美術（プロト・ガンダーラ美術）が生まれ、サカ王国に次いでガンダーラを支配したパルティア王国の時代、紀元後1世紀前半になってヘレニズム文化の復興があり、仏像が出現したと主張した [Marshall 1951: 691]。これら、仏像の出現をヘレニズム文化の影響から考える研究者は、ガンダーラ彫刻に表された仏像が「ギリシア風」であればあるほど古いと考える。その様式年代観から、彼らは、シャー・ジー・キー・デリー遺跡出土の銅製舍利容器に表わされた仏陀像を、様式の崩れた時期のものともみなした。

このように、仏像はヘレニズム文化の影響により出現した、とする見解が先行して広まった。一方、20世紀半ば頃になると、ローマ帝国の文化の影響で仏像が生まれたとする説が有力視されはじめた。その考えによれば、紀元後1世紀から盛んにおこなわれたローマ帝国とインドの貿易によってローマの文化が流入した結果、仏像が生まれたという。この考えを主張する代表的な研究者であるB. ローランドは、タキシラ地方の発掘成果を踏まえ、ガンダーラ美術様式の再検討をおこなった。彼は、シャー・ジー・キー・デリー遺跡出土の舍利容器に表された仏陀像を、ガンダーラ美術の初期段階のものともみなした。さらに彼は、フーシェやバッハホーファーに年代決定の根拠として取り上げられたビーマラーン舍利容器の仏陀像が、ローマにおける紀元後2世紀から3世紀の様式と対比できることを指摘した [Rowland 1936: 387-400]。年代を示すものとして利用された2つの舍利容器の仏像の様式について、それまでの見解と真逆の年代観が示されたのである。この主張は、ガンダーラ彫刻の年代研究において非常に画期的なものであった。

これらヘレニズム文化とローマ文化による影響双方を十分に考慮しながら、仏像の起源と展開に迫ったのが高田修である。高田は、マーシャルによるタキシラ地方のシルカップ遺跡の発掘成果の検討から、仏像の出現時期を紀元後1世紀後末期頃にあてた。彼によれば、出現期の仏陀像は西方的な様式のものである。仏像の出現時期が、パルティア王国時代のヘレ

ニズム文化再興期に続く時期であるからだ。高田は、この西方的な様式から、インド的なものへ変化するものとして、ガンダーラ美術様式をとらえた [高田 1967: 231]。これらの見解のように、ガンダーラ美術の発生を、ギリシアの影響から考えるにせよ、ローマの影響から考えるにせよ、20世紀半ば頃までは、ガンダーラ美術の様式は、西方的なものからインド的なものへと変化するものとして理解されていた。

1947年のパキスタンの分離独立後、各国の調査隊はガンダーラの現地調査を開始した。その中で、イタリア隊によるスワート地方のプトカラ I 遺跡の発掘調査は、再び、従来の年代観の見直しを迫る大きな成果を挙げた。この遺跡から出土した大量の石彫を、発掘者の D. ファッチェンナは、3つの様式グループに分けた。そして、彫刻の出土状況の分析と資料の観察から、インド的な様式（「ドローイング・グループ」）の彫刻が、写實的（つまり西方的）な様式（「ナチュラリストティック・グループ」）の彫刻に先行して作られたことを指摘した [Faccenna 1974: 174; Faccenna, Callieri, and Filigenzi 2003: 302]。それまでの年代観とは真逆の見解を、ファッチェンナは発掘成果を踏まえて提示したのである。

ファッチェンナの様式の年代観は、以後、さまざまな研究者によって受け入れられてきた。J. E. ファン・ロウヘイズン＝ドレーウは、この年代観を、自身の主張する仏像マトウラー発生説の根拠として利用した [Louheizen 1981]。また、L. ネールは、ドローイング・グループの彫刻との比較から、タキシラ地方におけるプロト・ガンダーラ美術の彫刻群の年代的な位置付けを確かめた [Nehru 1989]。最近では、仏陀像が表現されない仏伝図から仏陀像が表現される仏伝図への変化が、スワート地方のドローイング・グループの彫刻の中で起こったことが、宮治昭によって確かめられた [宮治 2005]。また、拙論でも、このスワート地方の様式の年代観をベシャーワル盆地（古代ガンダーラ地方）の彫刻においても応用できることを提示した [内記 2012]。

以上が、ガンダーラ彫刻の様式の年代観に関わる大まかな研究史である。新たな発掘成果やそれに伴う見解が、それまでの年代観の再検討を促す、という流れが繰り返されてきたことが見て取れよう。このように、様式の年代観については着実な検討が重ねられてきた。しかし、新たな情報が開示されることによって年代観が逆転する事態が度々引き起こされてきた点は、問題視されるべきである。また、どれだけ発掘成果に従っていても、様式的な観点には、調査報告者やそれをを用いる研究者の主観的な判断が入り込む余地がある。ガンダーラ彫刻の年代観は、今なお不安定な基礎の上に立っているのである。

このような不安定な状況を乗り越える手段を考えよう。まず、他の遺物や、遺構の編年とのクロスチェックから、彫刻の年代を検討する方法は有効である。バーラー・ヒサール遺跡やラニガト遺跡の発掘で明らかになりつつあるベシャーワル盆地における土器編年と、彫刻の年代研究をどのように結びつけていくかを検討する姿勢は今後必要となろう [Wheeler 1962; 桑山 1966; 難波 1986; 2011]。さらに、マーシャルによって示され、桑山正進によって整理されたタキシラ地方における石積の編年を、ベシャーワル盆地においてどのように応

用できるかを検討し、その石積編年と彫刻の関係を考察する作業も必要である [Marshall 1951; 桑山 1974; 2003]。一方、このような遺物や遺構の編年とのクロスチェックから彫刻の年代研究を進める方法とは別に、彫刻自体について複合的な視点から検討する方法も有効である。つまり、美術様式とは異なる視点から検討し、そこで得られた見解と、様式の年代観を照らし合わせながら議論を深める方法である。本論ではこれらの手段のうち、彫刻自体の複合的な検討を取り上げたい。今回は、これまで着目されることのなかった視点である「技術」的な観点から、ガンダーラ彫刻を検討する。

Ⅱ ガンダーラ彫刻に用いられた技術

本章では、ガンダーラ彫刻に用いられた技術にどのようなものがあるかを確認する。

1 彫刻に用いられた技術の概要

ガンダーラ彫刻は、主に、片岩やストッコ、泥を用いて製作された。前章で言及した舍利容器に表されたもののように、金属製の彫刻もわずかながら見つっている。また、木製のものも多数存在したであろうことが想像される。最近、アフガニスタンのメセ・アイナク遺跡から木製の仏陀像が出土したためである [岩井 2012: 図 15]。今回は、これらさまざまな素材を用いて製作される彫刻のうち、豊富な出土量をもつ石彫を扱う。

石彫は、浮彫画像帯、単独像、建築部材に分けられる。

浮彫画像帯は、仏塔の胴部や階段の蹴り込み、祠堂の腰壁を飾っていた。その正面には、仏伝図等が刻まれるが、従来ほとんど着目されてこなかった上下左右の面には、隣接する浮彫画像帯や建築部材と接合するための技術的な痕跡が残される。浮彫画像帯に残された接合痕跡としては、突出したホゾとそれを継ぐための溝、鎚（カスガイ）を引っかけて固定するための溝等がある。また、正面から背面に貫通した丸い孔が残されることがある。これは、釘を通して画像帯を後ろの壁に固定するためのものである²⁾。

単独像は、主に祠堂に設置された。単独像のうち立像では、腕が別に作られた例が多い。この腕と身体の接合のために、さまざまな接合方法が用いられた³⁾。その接合痕跡は正面を向くため、公開された写真等からもその存在を確認できる場合が多い。また、アフガニスタンのカーピシー地方にまで目を向けると、岩井俊平が着目するように、台座が別に作られる

2) これら浮彫画像帯の接合痕跡は、タレリ遺跡出土品においても確認される。まず、ホゾをもつことが分かる浮彫画像帯は、報告書の図版でも多数確認できる [水野・樋口編 1978: Pl. 105-8 等]。鎚を用いて接合した例は、資料の直接の観察によって確認することができる。例えば、「アーチ童子」浮彫画像帯の上面には鎚を噛ませた痕跡が残される [水野・樋口編 1978: Pl. 121-4]。正面から背面に貫通する孔をもつ例としては、「死んだ女が子を産んだ話」浮彫画像帯が挙げられる [水野・樋口編 1978: Pl. 84-7]。

3) 単独立像の腕の接合方法については、後述する。

単独立像がある〔岩井 2010：116〕。像と台座はホゾによって接合されていたようだ。

建築部材は、建物の装飾に用いられた。建築部材の各面にも、隣接する部材と繋ぐための接合痕跡が残される⁴⁾。

これらの石彫に残された痕跡から復元される接合方法は、彫刻の設置場所や、何と接合するかの用途によって使い分けられていたと考えられる。しかし、ガンダーラにおいては、彫刻が本来設置されていた位置（すなわち元位置）から出土することはほとんどない。また、上部構造の残る建物がほとんど確認されていないため、出土彫刻が建物のどの部分に設置されていたかを特定するのは困難である。さらに、発掘報告書の図版に載せられた写真のほとんどは、出土彫刻を正面から撮影したものである。そのため、上下左右の面に残された浮彫画像帯や建築部材の接合痕跡を確認することは難しい。

単独立像も、元位置からは出土しない。そのため、どのように建物に設置されていたかは分からない。しかし、腕に残された接合痕跡が、別に作られた腕を接合するために用いられたことは確かである。また、正面から確認できるため、図版等の写真からも情報を読み取りやすい。今回は、数が少ない弱点はあるものの、用途がはっきりしており、情報も抽出しやすい単独立像の腕の接合方法を取り上げる。これら単独立像がガンダーラにおける仏教の主要な崇拜対象の一つであった点も、そこに用いられた技術を検討する価値を保障している。

2 単独立像の腕の接合方法

ここで改めて、単独立像に用いられた接合技術を概観しておく。単独立像の接合痕跡は、そのほとんどが、像の右腕部分で確認される。接合部位には、ホゾや金属軸を正面から差し込んだと思われる孔、銚を引っかけるために彫り込まれた溝、蟻継（アリツギ）用のホゾをスライド式に上部から差し込むための溝等の痕跡が残される（図 2）。また、これらの痕跡が複数組み合わせるものもある。一方、出土した腕にも、ホゾや銚の溝等が残る。それらの腕を、痕跡から復元される接合方法によって身体に結合すると、像は、右手を前方に差し出しながらわずかに挙げ、掌を前方に向ける姿勢をとる⁵⁾。仏陀立像や菩薩立像のほとんどが、「施無畏印」の印相を結んでいたようだ。よって、結ぶ印相により接合する方法が使い分けられていたわけではない。また、数は多くないが、頭部装飾や肘部装飾が別に作られ、それらが接合された痕跡をもつ資料も存在する⁶⁾。この他に、損壊部の接着に銚が用いられてい

4) ホゾや銚を用いて接合されていた建築部材の例も、タレリ遺跡出土彫刻の中に確認できる。ホゾを使用した例は、〔水野・樋口編 1978: Pl. 126-21〕等、銚を使用した例は、〔水野・樋口編 1978: Pl. 126-32〕等である。

5) パリのギメ美術館所蔵のシャーバース・ガリー出土菩薩立像は、腕が接合された状態を示す好例である〔Foucher 1905: 表紙裏写真〕。

6) 別に作られた頭部装飾が接合された例は、メハサンダ遺跡から出土している（図 6-5）。また、大英博物館所蔵資料の中にも確認できる〔Zwalf 1996: fig. 76, fig. 81〕。別に作られた肘部装飾が接合された例は、ラニガト遺跡から出土している（図 3-5）。これらの装飾品の接合には、スライ

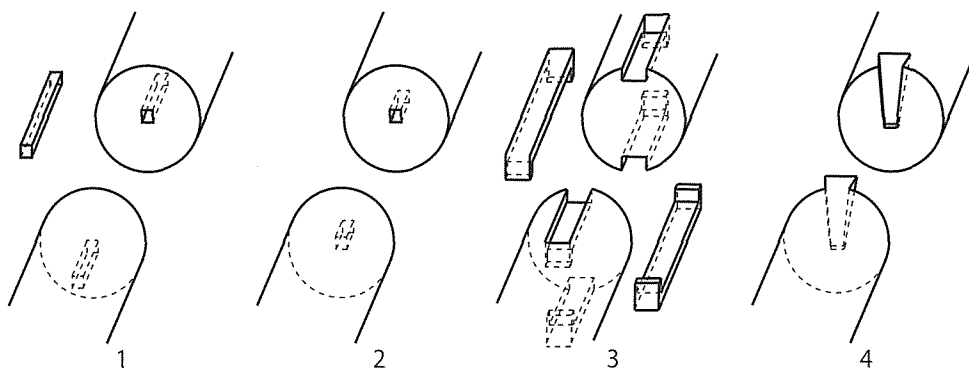


図2 腕の接合方法

たこと分かる資料がある⁷⁾。こうした例の存在によって、腕の接合に用いられた銚がすべて修復の際のもので、像自体は本来1つの石から彫りだされていた、と考えることもできるが、以下の理由で、その可能性は排除される。1つの石から像を彫り出した場合、像には腕を別に作った場合とは異なる痕跡が残される。その痕跡とは、像の右肩前方と手の甲を橋状につないだ彫り残しの痕跡である⁸⁾。前方に出した腕を安定させるために、このような渡しが彫り残されたようだ。一方、腕に銚使用の接合痕跡をもつ立像は、肩の部分にこのような彫り残しをもたない。よって、銚の使用痕跡は、修復の際ではなく、別に作られた腕が接合された際に残されたものである。

このような、腕が身体とは別に作られ、接合された例のほとんどは、ペシャーワル盆地(古代ガンダーラ地方)の仏教寺院遺跡から出土している。また、ペシャーワル盆地よりインダス河を挟んで東南方にあるタキシラ地方においても、確実な出土資料が3例ある。しかし、北方のスイート地方や西方のアフガニスタン国内では、出土地の判明している例が認められない⁹⁾。後に述べるように、タキシラ地方出土彫刻はペシャーワル盆地から輸入された

下式に装飾部を差し込む蟻継の方法のみが用いられていたようだ。いくつかの方法が確認される腕の接合方法とは異なる傾向をもっている。従って、腕の接合と、これらの装飾部の接合は別個に検討されなければならない。

- 7) 損壊部の補修に銚が用いられた例として、サーリ・バーロール遺跡出土の仏陀立像が挙げられる。この資料では、銚が光背部分の補修に用いられたようである [Ingholt 1957: fig. 223]。
- 8) このような彫り残しの痕跡は、ジャマール・ガリー遺跡出土の仏陀立像や、伝タクティ・バーイー遺跡出土の仏陀立像の肩の部分に確認される [Zwalf 1996: fig. 2, fig. 13]。
- 9) ロンドンのヴィクトリア & アルバート美術館所蔵資料の中に、スイート地方出土とされる蟻継の痕跡をもつ仏陀立像がある [Ackermann 1975: Pl. LXIII]。また、ウェブサイトで公開された大英図書館の写真資料のうち、スイート地方出土とされる彫刻群の中に、やはり、蟻継の痕跡をもつ菩薩立像がある [http://www.bl.uk/onlinegallery/index.html, item no. 10031161]。しかし、E. エリントンが注意を促しているように、古い時代に収集されたこれらの彫刻の出土地を、伝えられている通りに信じることは危険である [Errington 1990]。イタリア隊やペシャーワル大学隊によって発掘された一連のスイート地方の諸遺跡からは、腕が別に作られた単独像は出土してい

ものと考えられている。タキシラ地方で出土した資料のうち、1点の男性像には地元産の砂岩が用いられているが、残りの2点にはタキシラ地方では採掘されない片岩が用いられているからである。腕が別に作られる単独立像は、ペシャーワル盆地を中心に製作されていたのである。

発掘調査で出土した腕の接合痕跡をもつ資料を図に示した(図3~図11)。ペシャーワル盆地のものを遺跡別に示し、タキシラ地方のものをまとめて示した。これらの図には、報告書掲載写真からではどのような接合方法がとられていたかを特定しにくい資料、頭部装飾や肘部装飾が接合されていた痕跡をもつ資料、補修の際の接合痕跡をもつ資料も含まれている。これらの遺跡から出土した資料を見ながら、腕がどのように接合されていたかを概観したい。

以下に見るように、腕の接合方法には、大きく分けて4つの方法があったようだ。金属軸を用いて接合する方法、腕のホゾを差し込んで接合するもの、2本の銚を引っかけて接合するもの、蟻継式のホゾをはめ込んで接合するもの、の4つである。

a 金属軸による接合(図2-1)

腕の接合面の中心に、円形ないし方形の穿孔をもつ資料がある。この痕跡からは、2種類の接合方法が復元できる。1つは金属軸を用いて身体と腕を接合する方法で、もう1つは腕から突出するホゾをこの孔に差し込んで接合する方法である。接合部に残される穿孔の径が小さい資料は金属軸で接合され、径が大きいものはホゾを差し込んで接合されたと考えられる。

タレリ遺跡出土の仏陀立像(高さ23.8 cm)(図4-1)や、シャイハーン・デリー遺跡出土の菩薩立像(高さ12.2インチ=約31 cm)(図7)は、像高が低い。そのため、接合部の穿孔の径も小さい。ホゾによる接合では強度が保てないであろうから、これらの穿孔は、金属軸を通して接合された際の痕跡であろう。ただし、接合面に金属軸を通すための穿孔をもつ腕は、現段階で確認されていない。

b ホゾ継による接合(図2-2)

シルカップ遺跡出土の男性立像には、径の大きい穿孔が残される(図11-1)。この像の腕は、ホゾを差し込んで接合されていたようだ。また、タレリ遺跡やメハサンダ遺跡から出土した腕の接合部には、ホゾが残されている(図4-3, 図6-3)。

また、ホゾによる接合痕跡と、銚を利用した接合痕跡が併存する例がある(図5-1, 図11-2)。ホゾを通すだけでは接合が不安定であったため、銚によって補強されたのであろう。

c 銚を用いた接合(図2-3)

腕と身体の接合部の2側面に銚を噛ませるための溝をもつ資料がある。その溝の両端は、深く彫り込まれる。そこに銚の先端が差し込まれていたのであろう。多くの場合、接合部の

ない。スワート地方では腕を別に作る造像方法が一般的には用いられなかったようだ[Faccenna 1962等; Dani (ed) 1968/69]。



図3 ラニガト遺跡の資料

上下2側面にこの痕跡が残される。そして、接合面には、工具を使って浅く凹凸がつけられる。これはおそらく、接合の強化を図るために用いられた接着剤の効果を高めるためのものである。このような凹凸は、サーリ・バーロール遺跡出土の仏陀立像（図9-1, 2）や、タレリ遺跡出土の衣片（図5-10, 11）の接合面ではっきり確認できる。接合に鋸を用いた痕跡をもつ腕の例としては、タレリ遺跡出土のものが挙げられる（図4-4）。



図4 タレリ遺跡の資料1

d 蟻継による接合 (図2-4)

腕がスライド式に接合された痕跡をもつ資料がある。ラニガト遺跡出土の仏陀立像の胴部片 (図3-2) や、タレリ遺跡出土の腕部片 (図5-2) 等が、その例である。これらの彫刻の腕の接合面には、V字形の溝が残る。この溝は接合面から垂直に彫り込まれたものではなく、奥にいくほど幅広になるように彫られている。この溝に、腕のホゾを上からスライドさせてはめ込む。このような溝に対応するホゾは、根元よりも先端がわずかに幅広になる。ラ

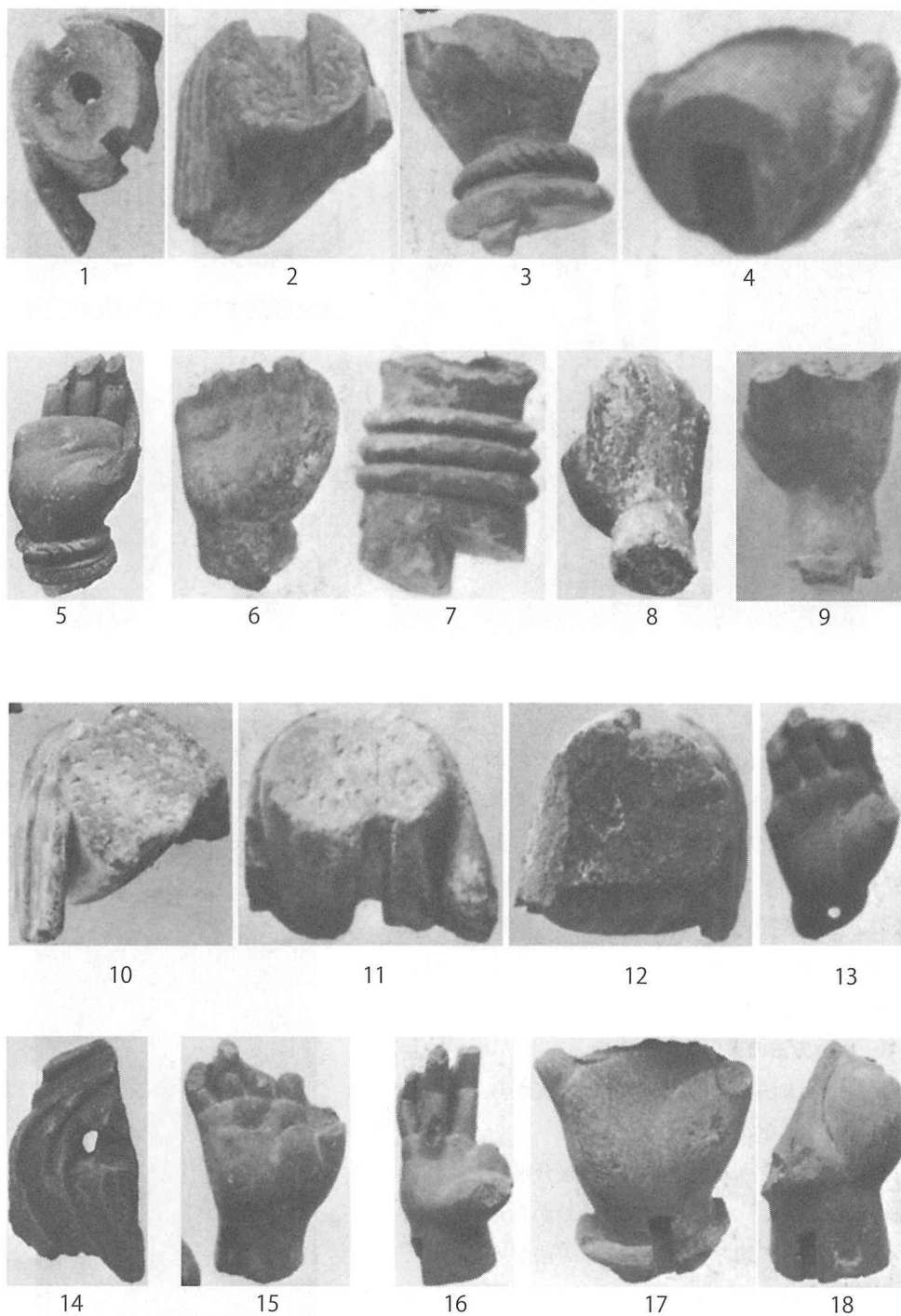


図5 タレリ遺跡の資料2



図6 メハサンダ遺跡の資料

ニガト遺跡から出土した2点の腕はそのようなホゾをもつ（図3-11, 12）。はめ込まれたホゾが溝に残されたままの資料が、ラニガト遺跡から出土している（図3-10）。ここでは、建築学の用語を借用し、この方法を蟻継式の接合方法と呼ぶ。蟻継によって接合された彫刻の中にも、鋸で接合を補強した例がある（図3-1, 2, 図6-4）。

3 接合方法の違いが示すもの

腕の接合方法の違いは、以下の事実から、地域による違いではない。

まず、先に述べたように、腕の接合痕跡をもつ資料のほとんどが、ペシャーワル盆地から見つかっている。だから、地方ごとに異なる方法が用いられていたわけではない。また、ペシャーワル盆地の代表的な寺院遺跡であるタレリ遺跡からは、先に紹介した4種類それぞれの方法で腕が接合されていた彫刻が出土した。よって、これらの技術が小地域ごと、



図7 シャイハーン・デリー遺跡の資料

あるいは遺跡ごとに使い分けられていたわけではない。以上の理由から、接合方法の違いは地域差を反映しているわけではない。

資料の出土状況を確認すると、接合方法の出現時期に違いがあることが判明する。次章では、腕の接合方法の年代を検討する。

Ⅲ 接合方法の年代

前章では、腕の接合方法が4種類あることを確かめた。また、方法の違いが地域の違いによるものでないことも確認した。本章では、その違いが年代的な差異を示すことを指摘する。出土地の分析と、資料の接合痕跡の切り合い関係の分析により、金属軸やホゾを用いて腕を接合する方法が、比較的古い時代から用いられていたことが判明する。他の接合方法は、その利用年代を遡らせる積極的な証拠がないことから、新しい時代に採用されたものである。

Ⅰ 資料の出土状況から考える接合方法の年代

以下に4つの遺跡から出土した資料を挙げ、接合方法の年代を検討したい。4つの遺跡のうち、最初の2つは、タキシラ地方の遺跡であり、残りの2つはベシャーワル盆地の遺跡である。

a シルカップ遺跡出土砂岩製男性立像（図 11-1）

最初に取り上げるのは、タキシラ地方シルカップ遺跡出土の地元産砂岩で作られた男性立像である。本像の腕の接合部には円形の穿孔が残される。この像の高さは、26.25 インチ（約 66.5 cm）である。像は十分な高さをもち、その腕に残される穿孔の径も大きい。だから、この孔は、腕のホゾを差し込むためのものである。

この像が出土した第Ⅱ層は、マーシャルによれば後期サカ時代からバルティア時代、つまり紀元後1世紀前半頃のものである [Marshall 1951 : 118]。この像は、別に作られた腕が接合される単独像の中で、最も早い時期の例である。像はガンダーラ産の片岩で作られておらず、仏教彫刻でもない。だから、ガンダーラ彫刻とは言い難い。しかし、ホゾによって腕を接合する方法が、すでにこの頃に用いられていたことを示す点で重要な資料である。

b モーラー・モラードウ遺跡出土菩薩立像（図 11-2）

次に取り上げるのは、同じくタキシラ地方に所在するモーラー・モラードウ遺跡出土の片岩製菩薩立像である。その腕の接合面にはホゾを差し込むための孔が残され、また、接合部側面には鏝を引かけるための溝が残される。この寺院は仏塔と僧房から構成される。この菩薩立像はそのうちの、僧房の一室（第8室）に設置されていたものと考えられている [Marshall 1951 : 362]。

タキシラ地方で建物に用いられた石積が時代とともに変化することは、早くにマーシャルによって示された [Marshall 1951]。この石積の年代観に基づき、寺院に用いられた石積方



1



2



3



4



5

図8 タフティ・バーイー遺跡の資料

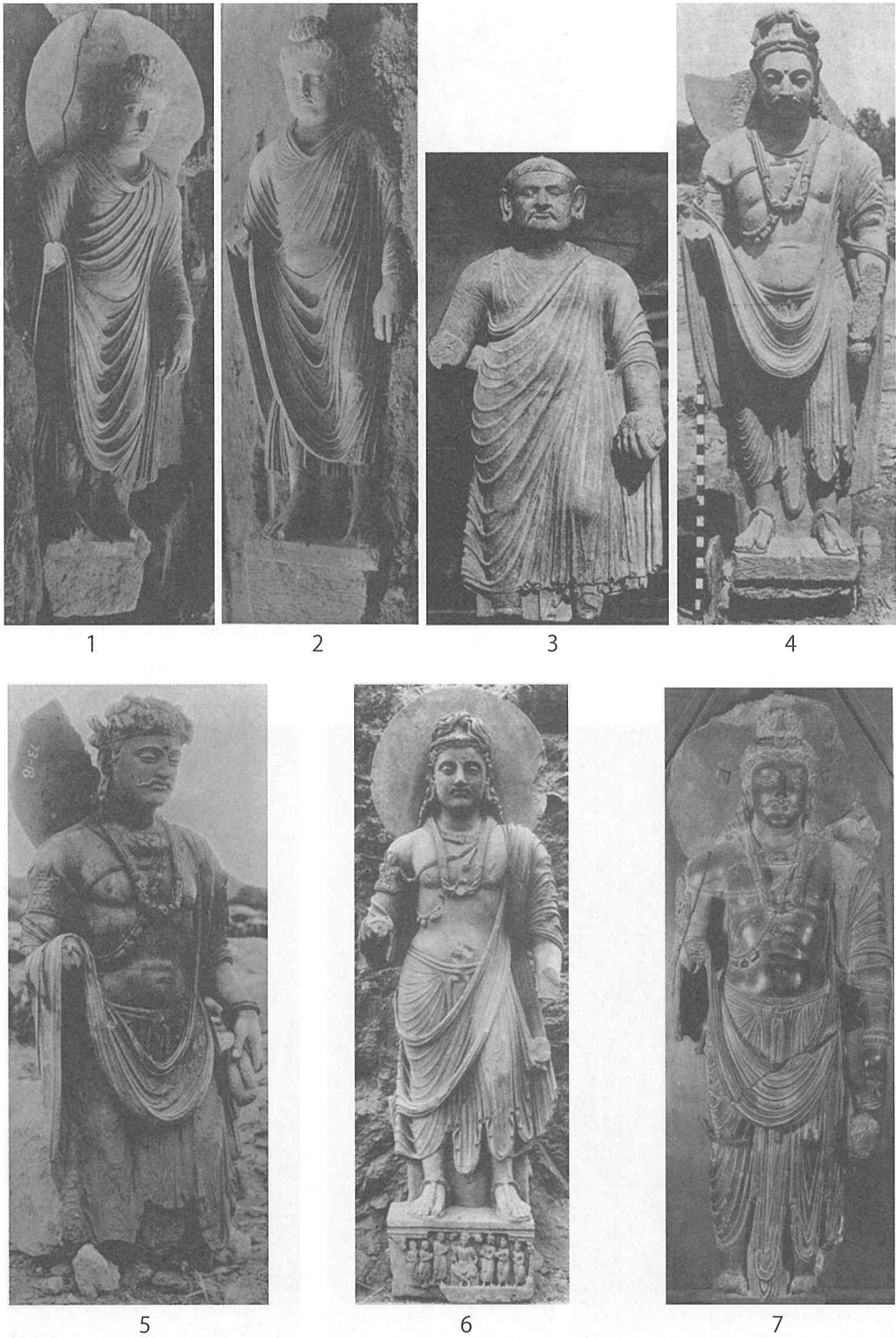


図9 サーリ・バーロール遺跡の資料



図10 ジャマール・ガリー遺跡の資料

法を整理した桑山によれば、モラー・モラードゥ寺院の創建は、第Ⅲ期、地文様積の間石が粗く大きくなった時期である〔桑山 1974 : 340〕。半切石積が用いられた第Ⅴ期に寺院の全般に改修があったが、新しく祠堂等の建物が建てられることはなかったようだ〔同 : 344〕。だから、菩薩像の設置は寺院の創建時に求められる。タキシラ地方において、地文様積みはクシャーン王クジュラ・カドフィセスの治世以後に採用され、半切石積みはカニシカ 1 世以後のある時期に用いられるようになった〔桑山 2003 : 10, 17〕。こ

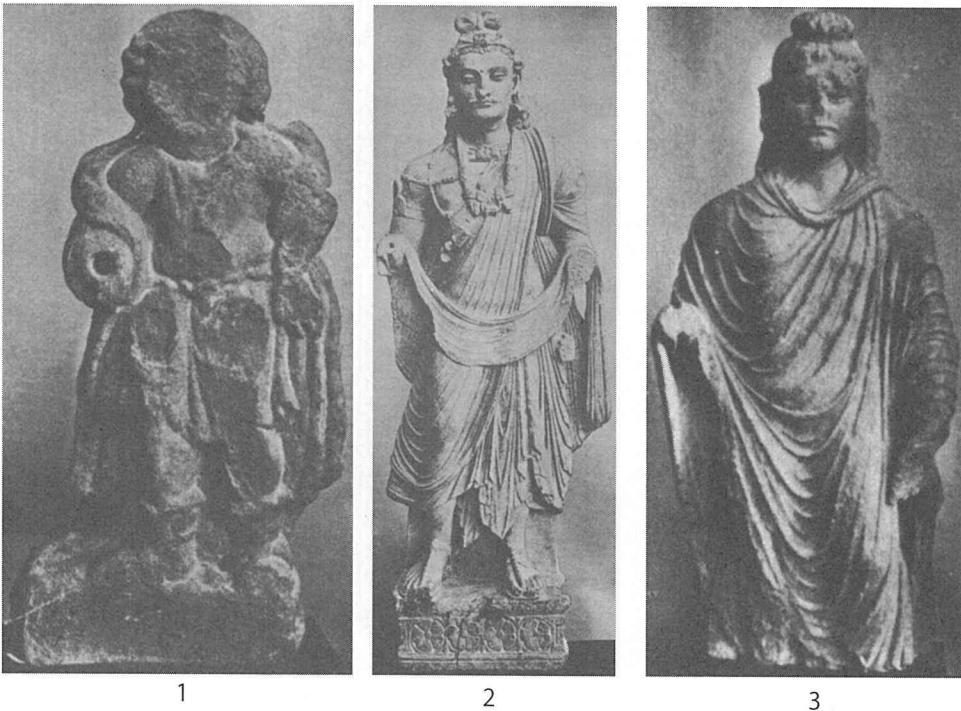


図11 タキシラ地方の資料

の石積編年に従えば、モラー・モラドゥ寺院の菩薩像は、カニシカ1世の治世か、それ以前の時代に設置されたものである。すなわち、ホゾによって腕が接合された片岩彫刻が、2世紀前半頃までには現れていたことになる¹⁰⁾。

以上の2点の他、タキシラ地方から出土した資料には、ダルマラージカー遺跡出土のものがある(図11-3)。2本の鏝によって腕が接合されていた片岩製仏陀立像である。ダルマラージカー遺跡においては、長期に渡って祠堂が建立され続けた。よって、像が設置された年代を特定するのは難しい。

タキシラ地方では、片岩が採掘されない。そのためマーシャルは、この地方から出土する片岩彫刻が、ペシャーワル盆地から輸入されたものであると考えた[Marshall 1951: 691-692]。タキシラ地方で腕が別に作られた例が、わずか3点しか見つかっていないのは、片岩彫刻の入手を他地域からの輸入に頼っていたためであろう¹¹⁾。桑山は、ペシャーワル盆地の大部分の仏教寺院のプランが、タキシラ地方における第Ⅲ期ないし第Ⅳ期以降のものと関係深いことを指摘している[桑山1974: 353-4]。ペシャーワル盆地とタキシラ地方の仏教寺院間の相互の影響関係が強まったこの時期以後、ペシャーワル盆地から片岩仏教彫刻が輸入されるようになったのであろう。

続いて、その輸入元であるペシャーワル盆地の、腕の接合方法の年代に関わる出土例を確認する。

c シャイハーン・デリー遺跡出土菩薩立像(図7)

ペシャーワル盆地に所在するシャイハーン・デリー遺跡から出土した菩薩立像は、腕の接合面に穿孔をもつ。この像は、12.2インチ(約31cm)の小像である。よって穿孔の径も小さい。ホゾで接合するには、径に十分な大きさが必要である。よって、この小さい穿孔は、金属軸で腕を接合するためのものであろう。

シャイハーン・デリー遺跡は、第2のプシュカラヴァティーに比定される都市遺跡である。当遺跡は、ペシャーワル大学によって発掘調査された[Dani 1965/66]。今回扱う菩薩立像を含む片岩仏教彫刻は、このペシャーワル大学の発掘調査区中の、「仏教教師ナラダカの家」と呼ばれる家屋遺構から出土した。

報告書において、発掘者のA.H.ダニは、ガンダーラ彫刻の年代についての見解を示した。この見解は、層位発掘による資料の出土状況と、炭素年代測定法を用いて得られた絶対年代に基づいている。しかし、F.R.オールチンやM.タッデイ、P.カリエリが注意を促しているように、その見解を無批判に受け入れるのは危険である[Allchin 1972: 15-6; Taddei

10) カニシカ1世の即位年代については議論が多いが、ここでは2世紀前半とする説をとる[Bivar 2000; Falk 2001; 桑山2003等]。

11) なお、タキシラ博物館のカタログにもう1点、鏝の使用痕跡が残される資料が掲載されている[Nadiem 2008: 50]。充分な解説はなく、出土地も記されていないため、この彫刻がどのような経緯で博物館に収蔵されたかは分からない。

2006: 50; Callieri 2006: 77]。彼らに指摘された問題は2点ある。炭素年代測定法によって得られたデータや出土した貨幣を適切に扱えていない点と、報告書に出土状況を示す記述や写真がない点である。片岩彫刻は遺構内で2つの層から出土したと報告された。しかし、出土状況を示す情報が記されていないため、この情報も信じられるものかどうか分からない。一般に長期利用や再利用がなされたと考えられる片岩仏教彫刻が、家屋の存続期間の途中で廃棄されたとは考え難い。

シャイハーン・デリー遺跡の報告内容にはこれらの問題点があるが、遺跡の廃棄時期と出土彫刻の関係から、彫刻の年代を考察することは可能である。当遺跡出土彫刻は、当然のことながら、遺跡が廃棄された時期以前に製作されたものである。遺跡が廃棄された時期は、大量に出土した貨幣から求められる。シャイハーン・デリー遺跡から出土した貨幣のうち、最も新しい時期のものは、ヴァースデーヴァ1世の発行したものである。この遺跡が王の治世か、それをあまり下らない時期に廃棄されたことが分かる。よって、菩薩立像を含む当遺跡出土の片岩彫刻はすべて、このヴァースデーヴァ1世の治世頃以前に製作されたものである。つまり、金属軸を使用して腕を接合する方法は、3世紀前半以前にはペシャーワル盆地に現れていたのである。

d タレリ遺跡第2塔院出土仏陀立像(図4-1)

続いて、タレリ遺跡出土の1点の仏陀立像を取り上げる。この仏陀立像も、腕の接合面に穿孔をもつ。像は残高23.8cmの小像である。穿孔の径も小さい。よって、像の腕は、金属軸で接合されていたと考えられる。

京都大学によって発掘調査されたタレリ遺跡は、ペシャーワル盆地における大寺院遺跡の1つである。この遺跡からは、金属軸で腕が接合された立像、ホゾ継で接合されたもの、蟻継で接合されたもの、鏝を用いて接合されたものが出土した。つまり、この寺院では、先章で挙げた4つの接合方法すべてが、腕の接合に用いられていたのである。これらのうち、ホゾ継で接合したもの、蟻継で接合したもの、鏝を用いて接合したものは、遺跡のD地区主塔院から出土した。一方、金属軸を用いて接合したものだけは、C106と番号づけられたC地区第2塔院から出土した。

報告によれば、タレリ寺院の活動時期は、「盛期クシャーン期から中期クシャーン期(150-350年)」にかけてである[樋口1978: 115]。これは出土貨幣の検討から導き出された年代である。

一方、難波洋三のラニガト土器編年によれば、タレリ寺院の創建時期はラニガト4期か5期で、廃絶時期は不明である[難波2011: 286]。ラニガト4期の年代は、紀元後3世紀前半以前で、5期の年代は、3世紀前半である¹²⁾。

12) 難波による見解をまとめると以下ようになる[難波2011]。

まず、ラニガト1~4期に多く見られる大型壺第1・2・6型式、小型鉢第4・5a型式の土器はタレリ遺跡から出土していない。この点からは、タレリ寺院の創建はラニガト5期に下る。一方、

ここで、小仏陀立像が出土したC地区第2塔院(C106)の造成時期について考えたい。まず、この地区から出土した貨幣はヴァースデーヴァ1世の1枚の銅貨のみである〔小谷1978b:109〕。1枚の出土貨幣から、地区の造成時期や利用時期を特定することは不可能である。また、当地区からは土器の出土が報告されていない。よって、土器編年から年代を考察することも不可能である。このように、貨幣と土器から当地区の年代を知ることはできない。そこで、私は、彫刻の素材の割合に注目した。

このC地区第2塔院から出土した石彫は、報告では、「ガンダーラ美術特有のあの流暢な衣文の襞を失い、形式的、平面的な作風の石彫類である。」と説明されている〔小谷1978a:88〕。また、この記述に続いて、「ストゥッコ塑像のほうは、だいたいそういった彫刻の衰退と併行して、しだいに多くの寺院荘厳につかわれはじめたらしい。」と述べられている。この地区の石彫は、ストゥッコ塑像が用いられるようになった時期のものであると説明されているのである。

ところが実際には、この記述内容に反し、このC地区第2塔院からは、ストゥッコ塑像は出土していない。ストゥッコ製の框や肘木、柱頭断片等は出土したが、これらは、ストゥーパを飾る装飾用のものである。つまり、造像には片岩のみが用いられていたのである。ストゥッコ塑像が多数出土したD地区主塔院とは対照的な状況である。ガンダーラにおいて、仏教彫刻の素材は、片岩からストゥッコへと変化したと考えられている〔Marshall 1960:109; 小谷1978a:50等〕。この通説に従うならば、C地区第2塔院の建物に彫刻が設置されたのは、ストゥッコ塑像が用いられるようになる時期以前である。このことから、この塔院から出土した片岩彫刻群は、タレリ寺院の中でも比較的早い段階に設置されたものであったと言えよう。

タレリ遺跡からはラニガト4期の標識資料であるランプ第1c型式が出土した。そのため、寺院の創建時期はラニガト4期に遡る可能性がある。

第1c型式のランプは、ラニガト遺跡の奉献小塔群基壇の間隙から出土した。この奉献小塔群の基壇は後に埋め立てられ、その上には貨幣を奉納した板が設置された。この奉納板に納められた貨幣の最も新しいものはヴァースデーヴァ1世のものである。このことから、ラニガト4期の年代はヴァースデーヴァ1世の治世以前、すなわち、紀元後3世紀前半以前である。

一方、ラニガト5期の小型壺の型式構成と、シャイハーン・デリー遺跡の出土土器の型式構成は類似する。このことから、ラニガト5期とシャイハーン・デリー遺跡の下限は併行する。先にも考察したように、シャイハーン・デリー遺跡の下限は、ヴァースデーヴァ1世の貨幣から求められる。従って、ラニガト5期の年代は、紀元後3世紀前半のヴァースデーヴァ1世の治世頃である。

タレリ遺跡からは、ラニガト8期の土器型式が出土している。ラニガト8期は、紀元後9世紀以後で、11・12世紀を含む時期である。それは、ラニガト8期の基準資料の1つである、第23型式の小型壺の中からインド・イスラム貨幣が出土したからである。そして、ラニガト8期と併行するダムコット遺跡5期の層からヒンドゥー・シャー期の貨幣が5枚出土したからである。ただし、建造物は使われ続けたが、寺院の活動はある時期に終焉を迎えたようだ。よって、寺院の廃絶年代は不明である。

いつからストウッコが主な彫刻素材として用いられるようになったかは、まだはっきり分かっていない。そのような中で、ラニガト遺跡において発見された貨幣奉納板の存在は、ストウッコ塑像利用の年代を考える上で重要である。報告によれば、奉納板は、奉獻小塔 22 南側に据えられたストウッコ塑像の下から見つかった。この奉納板には、14 枚の貨幣が打ち込まれていた。打ち込まれた貨幣のうち、最も新しいものはヴァースデーヴァ 1 世のものである [小谷 1986: 41-43]。この出土状況から、ヴァースデーヴァ 1 世の治世頃にはすでに、ストウッコが積極的に彫刻素材として用いられていたことが分かる。だから、片岩彫刻によってのみ飾られていたタレリ遺跡の C 地区第 2 塔院の造成時期はヴァースデーヴァ 1 世の治世以前である。先に見た土器編年からのタレリ遺跡の年代に照らし合わせると、ヴァースデーヴァ 1 世以前の時代は寺院の最初期段階である。だから、この地区から出土した小仏陀立像は、タレリ寺院の最初期に設置されたものである可能性が高い。

e 小結

以上の 4 つの遺跡の分析から、金属軸を通して接合する方法と、腕のホゾを接合面の孔に挿入して接合する方法が、比較的早い時期から用いられていたことが判明した。一方で、蟻継による方法や、鏝のみで接合する方法については、その年代を遡らせる出土状況が確認されない。よって、前者の 2 技法は年代的に古く、後者の 2 技法は年代的に新しいと言える。

出土地分析から導き出したこの年代観の裏付けを得るために、次節では接合痕跡の切り合い関係を分析する。

2 接合痕跡の切り合い関係

前節で私は、彫刻の出土状況の検討から接合方法の出現時期の差を考察した。この時期差を裏付ける資料が、出土地不明品の中に存在する。これらの資料中に残された接合痕跡の間の切り合い関係の分析からも、ホゾを用いた方法が古く、蟻継による方法が新しいことが指摘できる。

これまで私は、できる限り出自の怪しい資料を避けて分析をおこなってきた。出土遺跡の不明な資料の中には、本物であるかどうかははっきり分からない資料が混ざっているからである。また、出土地が分かっていなければ、彫刻を歴史的な前後関係の中に位置付けるのが困難だからである。それでも、ここではあえて出土地不明の資料を扱う。それは、これらの資料が、先に示した接合方法の出現順についての見解と合致する情報をもつためである。贋作者達が、今回の私の論考のために、以下に見るような複雑な接合面の状況を用意してくれたとは考え難い。

以下に、2 点の彫刻に残された接合痕跡を分析する。

a 根津美術館所蔵菩薩立像の腕の接合痕跡

まず、1 点目に取り上げるのは、東京の根津美術館が所蔵する菩薩立像である [根津美術館 2000: No. 28]。この彫刻の腕の接合面を観察すると、そこに残された接合痕跡は、複雑

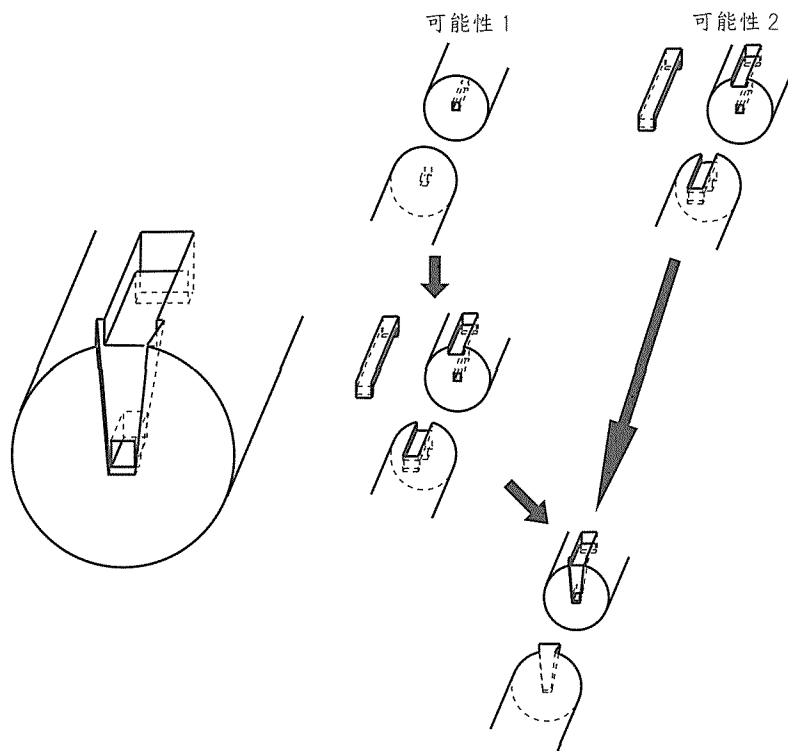


図 12 根津美術館所蔵資料の接合痕跡

な状況を示す（図 12 左）。まず、接合面には縦長の長方形の溝が残される。この溝は奥にいくほど幅広になるので、蟻継に用いられたものである。そして、この溝につながるようにして、接合部上面には、鋸を引っかけるための溝が走る。さらに、接合面の中央部分には、奥に伸びる正方形の穿孔がある。この像の腕の接合部には、ホゾを挿入する方法、蟻継による方法、鋸による方法の 3 種の方法を用いた接合痕跡が残されるのである。

この接合部の状況から、どのような接合方法が復元できるだろうか。これら複数の接合方法の同時の利用は不可能である。まず、腕のホゾを挿入する方法と、腕を蟻継する方法を、同時に用いることはできない。なぜなら、ホゾ挿入による接合は正面方向からの接合であり、蟻継による接合は上面方向からの接合だからである。この 2 方向からの接合を同時におこなうことはできない。また、この資料で、鋸による接合と蟻継による接合が同時におこなわれたとは考え難い。なぜなら、そのようにした場合、鋸の溝は、蟻継した接合部のホゾをも削ってしまうからである。これでは、蟻継による接合の強度が弱められてしまう。

この彫刻において、これらの接合方法の同時の利用は、不可能ないし不適切である。従って、そこに残された接合痕跡は、異なる時点で刻まれたものである。この資料において、腕は補修されたのである。つまり、いずれかの方法で接合されていた腕が、ある時点で壊れて

しまい、その後、新しく新調された腕が別の方法で接合された、と考えられる。

本例の場合は、ホゾによる接合が本来の接合で、蟻継による接合が修復時の接合である。逆は考えられない。本来、腕が蟻継により接合されていて、それが壊れた際に、正方形のホゾをもつ腕が新調され、挿入式に接合された場合を考えてみよう。その場合、身体側の接合部には蟻継用の溝が無意味な空間として残る。これでは、新調した腕のホゾが浮くことになり、不安定な接合状態が生み出されてしまう。一方、最初に腕がホゾを挿入する形で接合されていて、それが壊れた際に、蟻継用のホゾをもつ腕が新調され、身体側の接合部に蟻継用の溝を彫って接合された場合を考えてみよう。この場合は、ホゾ挿入時の穿孔は、蟻継による接合にいかなる支障をももたらさない。このように、この菩薩立像に残された接合痕跡からは、ホゾによる接合方法が早い時期のものであり、蟻継による接合方法が遅い時期のものであることが読み取れる。

では、この資料の、銚の溝はいつ用いられたものであろうか。本例は、銚だけで腕が接合されていた時期をもたない。銚を引っかけるための溝が接合部上面の一側面にしか確認されないからである。よって、この彫刻において銚は、挿入式のホゾによる接合を強化するために用いられた。本像において銚が、接合の当初から使用されたかどうかは分からない。可能性として、最初にホゾのみによって接合されていたものが、後に銚によって補強された状況も考えうる（図 12 右）。

b ノートン・サイモン美術館所蔵菩薩立像の腕の接合痕跡

2点目は、アメリカ合衆国バサデナのノートン・サイモン美術館が所蔵する菩薩立像である [Carter 2000: Fig. 1]。この資料の接合面には、長方形の溝が残されている。先の例と同様に、溝の奥の幅は、接合面における溝の幅に比べて広い。よって、これは蟻継用の溝である。そして、この蟻継用の溝の奥壁下方、接合面の中心部には浅い穿孔が残される。これはホゾを挿入するための孔の残部であろう。最初、腕が挿入式に接合されていたが、後の補修の際に、新調された腕が蟻継式に接合されたのである。この資料においては、蟻継用のホゾの奥に残された穿孔が浅い。蟻継用の溝を彫ったため、先に存在したホゾ挿入用の孔は、わずかにしか残されなかった状況が読み取れる。

c 小結

このように、出自の不明な2点の資料に残された腕の接合痕跡の観察からは、接合方法の使用順序が導き出される。ホゾを挿入して接合する方法が先に用いられ、蟻継によって接合する方法が後に採用された。この使用順序は、先の、出土状況から考察した腕の接合方法の出現順序と一致する。

3 接合方法の出現時期

資料の出土地の分析と、資料に残された接合痕跡の切り合い関係の分析から、金属軸やホゾによる接合方法が相対的に古く、蟻継や銚による接合方法が新しいことを示した。前2者

の出現時期は、シルカップ遺跡の出土例から、紀元後1世紀の前半に遡る。一方、後2者の出現時期は、シャイハーン・デリー遺跡で出土していないことから、ヴァースデーヴァ1世の治めた3世紀前半頃以後である。

この接合方法の年代観が、美術様式の年代観とどのように関わるかを次章で検討したい。

IV 美術様式との関係

前章では、石彫の腕の接合方法の違いが、時期差を反映することを示した。以下にみるように、この接合方法の変化は、美術様式の変化と相関する。本章では、接合方法と美術様式との関係を分析する。そのために、美術様式に関わる3つの要素を取り上げる。衣文表現、頭髮表現、台座の文様意匠の3つである。

I 衣文表現との関係

私は以前に、ガンダーラ美術様式の年代観に関する論考を書いた [内記 2012]。そこで私は、スワート地方で発掘成果によって組み立てられつつある彫刻の美術様式の年代観が、ペシャーワル盆地の彫刻においても適用できることを示した。つまり、スワート地方の写実的な様式グループ (「ナチュラルスティック・グループ」) とその後の定型化したグループ (「ステレオメトリック・グループ」) に対応する様式グループが、ペシャーワル盆地にも存在し、それらが年代的に順序付けられることを示したのである。写実的な様式から定型化した様式への変化の時期は、シャイハーン・デリー遺跡の彫刻の分析を通して考察した。シャイハーン・デリー遺跡から出土した彫刻は、ほとんどが写実的な衣文表現をもつものであるが、その中に、1点だけ定型化した表現である二重平行線による衣文をもつものが含まれる。この出土状況から、シャイハーン・デリー遺跡の最終段階になって、定型化した様式の彫刻が作られ始めたことが分かる。シャイハーン・デリー遺跡が廃棄された時期は出土貨幣からヴァースデーヴァ1世の治世前後と考えられるから、様式の変化の時期は、この王の治世前後にあてられる。

また、この、小像に用いられた二重平行線による衣文表現を手掛かりに、仏陀大像に用いられた定型化した衣文表現を求めた。高い鬘と低い鬘を交互に、そして、等間隔に繰り返す、いわゆる「翻波式」の衣文表現が、大像の定型化した衣文表現である (図 3-1, 2, 8, 図 6-1, 図 8-1, 2, 図 9-1, 2, 図 11-3 等)。2種類の定型化した衣文表現の同時の利用は、ラニガト遺跡やママーネー・デリー遺跡から出土した彫刻の図像において確認される [西川編 1994: Pl. 101-6; Frings (ed.) 2008: No. 177 等]。すなわち、それらの図像においては、仏陀大像の衣文が高い鬘と低い鬘を交互に繰り返す表現で表され、小像の衣文が二重平行線で表されるのである。この、高い鬘と低い鬘を繰り返す定型化した衣文表現は、自由に流れるように表現される写実的な衣文 [Ingholt 1957: fig. 207, 209 等] とは区別される。シャイ

表 単独仏陀立像における技術と様式の相関

出 土 地	残高 (cm)	接合痕跡			衣 文		頭 髪			台座 題材	出 典	備 考
		孔	鋸	蟻継	写実	交互	波	弧	卷			
不 明	—	○			○		○			花文	Ingholt 1957. XVII-4	
不明 (Peshawar ?)	45.1	○			○		○			植物	Zwalf 1996. 11	
Thareli	23.8	○			○					—	水野他 1978. 137-1	図 4-1
不 明	103	○			○		○			花文	栗田 1988. 11	
不 明	90.2	○				○	○			群像	Zwalf 1996. 3	
不 明	114.3	○	○		○		○			花文	Ingholt 1957. 209	
不明 (Mamane Dheri ?)	94	○			○		○			—	Ingholt 1957. 207	
不 明	—	○				○	○			植物	栗田 1988. 312	
不 明	175	○			○			○		なし	栗田 1990. 209	
不 明	—	○			○			○		なし	栗田 1990. 220	
Sahri Bahlol	213.4	○				○		○		なし	Ingholt 1957. 214	図 9-2
不 明	—	○				○	○			群像	栗田 1990. 201	
不 明	—	○				○	○			—	Ingholt 1957. XVII-1	
不 明	125.1	○				○	○			—	Ingholt 1957. 208	
不明 (Sahri-Bahlol ?)	92.5	○				○	○			—	栗田 1990. 196	
不 明	—	○				○		○		—	栗田 1990. 200	
不 明	104.2	○				○	○			群像	Zwalf 1996. 1	
Dharmarajika	24	○				○	○			—	Ingholt 1957. 216	図 11-3
Sahri Bahlol	264	○				○	○			なし	栗田 1990. 206	図 9-1
Takht-i-Bahi	102.9	○				○			○	なし	Ingholt 1957. 204	図 8-2
Ranigat	75	○	○			○				—	西川 1994. 99-4	図 3-2
Ranigat	120.5	○	○			○				—	西川 1994. 99-6	図 3-1
Thareli	42			○	○					—	水野他 1978. 90-1	図 4-2
Takht-i-Bahi	50.8			○		○	○			—	Zwalf 1996. 8	図 8-1
不 明	81.3			○		○	○			群像	栗田 1990. 213	
不明 (Amankot ?)	142.2			○		○		○		群像	Ingholt 1957. 199	
不明 (Swat or Buner ?)	72.8			○		○		○		—	Zwalf 1996. 4	
不明 (Karamar Hill ?)	109.2			○		○		○		群像	Ingholt 1957. 201	
不 明	188			○		○		○		群像	栗田 1990. 216	
Mekhasanda	135			○		○				群像	水野 1969. 35-2	図 6-1

ハーン・デリー遺跡の彫刻の出土状況から、ペシャーワル盆地においては、仏陀大像の衣文は、3世紀前半頃まで自由に写實的に表され、3世紀前半頃以後に定型化した表現で表されるようになったことが分かる。

前稿の分析に基づいた仏陀像の衣文表現と、今回扱った腕の接合方法との関係を表に示した(表)¹³⁾。腕を金属軸やホゾで接合した痕跡をもつ(つまり腕の接合面に孔をもつ)仏陀像の衣文の多くは、写實的に表現されている。一方、鋸や蟻継で接合された痕跡をもつ仏陀像の衣文の多くは、高い鬘と低い鬘を交互に繰り返す表現で表される。このように、腕の接

13) 表には、発掘報告書及び主要なカタログに掲載されている仏陀立像を恣意的な順序で並べた。中には、出土地不明資料も含まれている。大まかな傾向を掴む上では、これらの資料を含んで分析をおこなっても問題はないと判断した。

合方法の変化と、仏陀像の衣文の変化は相関する。

2 頭髪表現との関係

仏陀の頭髪表現は、4種類に分けられる。波状にうねる表現のもの（表中の「波」、図8-1）、弧線を左右対称に巡らしたもの（「弧」、図9-1, 2、図11-3）、肉髻部あるいは頭髪全体が巻毛を単位とする集合によって表現されたもの（「巻」[西川編1994: Pl. 103-2等]）、そして、螺髪（「螺」、図8-2）の4種である。波状の頭髪表現のみが写実的なもので、後3者は定型化した表現である。

腕の接合面に孔をもつ仏陀像の頭髪は、すべて波状に表現される。一方、銚を利用して接合された腕をもつ仏陀像の頭髪には、弧状の髪や螺髪のもものが含まれる。そして、蟻継によって腕が接合された仏陀像の頭髪は、巻毛によって表現されることが多い。このように、表からは、頭髪表現の変化が、接合方法の変化と対応していることが読み取れる。

3 台座の文様意匠との関係

台座の正面には文様意匠が施されることが多い。仏陀立像の台座に描かれた文様意匠としては、花を並べたもの（表中の「花文」）、植物を表すもの（「植物」）、礼拝対象と複数の供養者を描くもの（「群像」）等がある。また、もともと台座をもたない、あるいは台座が別に作られていたと考えられるもの（「なし」）がある¹⁴⁾。

腕の接合面に孔をもつ仏陀像の台座には花文が描かれるものが多く、他に、植物文や群像が描かれるものもある。一方、銚で腕が接合された像には、台座に植物文や群像の表現が施されるものがあり、台座自体をもたないものもある。そして、蟻継で腕が接合された資料の台座には、群像を描いたものだけが確認される。このように、腕の接合方法の違いと台座正面に描かれた文様意匠の違いはある程度対応する。

4 接合方法と美術様式の相関

腕の接合方法と、美術様式に関わる3つの要素の関係を分析した。衣文表現や頭髪表現の定型化は、腕の接合方法の変化と相関する。また、台座の文様意匠の違いも、腕の接合方法の違いと対応している。これらの分析から、腕の接合方法の変化と、美術様式の変化は相関することが分かる。

V ガンダーラ彫刻の接合技術の出現と展開

今回おこなった分析によって導き出せるガンダーラ彫刻の年代観をまとめておこう。

14) それぞれの例については、表に載せた出典を参照いただきたい。

まず、ホゾによって腕を接合する方法は、紀元後1世紀前半のタキシラ地方シルカップ遺跡出土の男性立像に用いられたものが、最も早い例である。また、2世紀前半頃以前のある時期には、モラー・モラドゥ寺院に、腕の接合にホゾ継が用いられた彫刻が設置されたようである。そして、金属軸を用いた腕の接合方法は、ペシャーワル盆地において、ヴァースデーヴァ1世の時代以前に現れていた。シャイハーン・デリー遺跡やタレリ遺跡C地区第2塔院から、その痕跡をもつ彫刻が出土したためである。

これらの接合方法の出現の背景に、私は、紀元前後に活発におこなわれるようになった西方のローマ帝国との交易を考える。ギリシア・アルカイック期以降、帝政ローマ期にかけての地中海沿岸部で作られた彫刻に、身体の各部分が別々に作られ、それらが金属軸やホゾで接合されていた例が多数確認されるからである¹⁵⁾。近年、建築様式や、浮彫画像帯に描かれたモチーフが、ローマ帝国から伝わったものであることが明らかにされてきている [桑山 1978; 田辺 2001]。単独像の造像方法も、この時期に西方から伝わったと、現段階では考えておきたい。

一方、地中海沿岸部の彫刻で、銚や蟻継によって各部分が接合される例に私はまだ出会っていない。先行する時代や同時代の他の地域の彫刻資料においても、私はこれらの接合方法が用いられた例を確認していない。従って、銚や蟻継によって腕を接合する方法は、ヴァースデーヴァ1世の時代以降に、ペシャーワル盆地において独自に生み出されたものであろう。ホゾによる接合を強化するため、あるいは、壊れた部分を補修するために、すでに銚は用いられていたようであるから、銚2本と接着剤によって接合する方法は、その工人たちの経験の中から生み出されたものと考えられる。一方、蟻継による接合方法を採用した背景は、現段階の資料状況からは判断できない。

ヴァースデーヴァ1世の治世頃には、写実的な様式に代わって、定型化した様式が現れはじめた。大像の衣文の襷は規則的に並べられるようになり、小像の襷は二重平行線で表現されるようになる。このように、技術的な要素と様式的な要素の2者の画期は、どちらもヴァースデーヴァ1世の治世前後に置くことができる。それらの変化が当時のペシャーワル盆地の経済的な繁栄によるものなのか、逆に困窮によるものなのかを判断するためには、今回示した年代的な基準をもとに、より広範に片岩彫刻の分析を進める必要がある。

お わ り に

ガンダーラ彫刻を多角的な視点から研究しようとする機運が近年高まってきている [Klimburg-Salter 1999: 13-4 等]。そのような中で、今回、私は彫刻の技術的な側面に着目

15) 例として、著名なミロのヴィーナスが挙げられる。この像は、上半身と下半身、腕の各部分から構成され、それらの接合には金属が用いられていた [Claridge 1990]。

して議論をおこなった。単独立像の腕の接合方法の違いは、年代的な差異を反映している。その変化は美術様式の変化と相関する。ガンダーラ彫刻の年代的な画期は、ヴァースデーヴァ1世の治世前後である。

今回、ガンダーラ彫刻の中で、単独立像を扱ったのは、単独立像がガンダーラの仏教において主要な礼拝対象であったと考えられるためである。また、技術に関わる情報が図版写真から引き出しやすかったためである。浮彫画像帯や建築部材にも技術の痕跡は残されている。しかし、これらの技術に関わる情報は、報告書の図版写真等から読み取れないことが多い。今回おこなった、技術的な側面からの彫刻の議論を深めるためにも、今後、これらの情報をも加味したカタログやデータベースの作成が望まれる。

〔付記〕本稿は2009年度に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を再構成したものである。修士論文の執筆時から、泉拓良先生、上原真人先生、岡村秀典先生、吉井秀夫先生から多大なご指導を賜った。また、泉屋博古館の樋口隆康先生、京都大学人文科学研究所の稲葉穰先生、龍谷大学の宮治昭先生、岩井俊平氏、宮本亮一氏、東北大学の芳賀満先生、立命館大学の下垣仁志氏、京都府立大学の向井佑介氏、奈良文化財研究所の石村智氏、諫早直人氏、川畑純氏からは、常日頃より助言の数々を頂いている。さらに、私は京都大学考古学研究室の先輩、同期、後輩に大変恵まれた。末筆ながら感謝申し上げます。

なお、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号22・6405）の成果の一部である。

図版出典

図1, 2, 12, 表 筆者作成／図3-1 西川編1994：Pl.99-6.／図3-2 西川編1994：Pl.99-4.／図3-3 西川編1994：Pl.110-11.／図3-4 西川編1994：Pl.110-2.／図3-5 西川編1994：Pl.110-15.／図3-6 西川編1994：Pl.110-4.／図3-7 西川編2011：Fig.6-12-8.／図3-8 西川編1994：Pl.98-1.／図3-9 西川編1994：Pl.107-8.／図3-10 西川編1994：Pl.109-37.／図3-11 西川編1994：Pl.109-38.／図3-12 西川編1994：Pl.109-39.／図4-1 水野・樋口編1978：Pl.137-1.／図4-2 水野・樋口編1978：Pl.90-1.／図4-3 筆者撮影（水野・樋口編1978：Pl.97-17の資料）.／図4-4 筆者撮影（水野・樋口編1978：Pl.97-85の資料）.／図5-1 水野・樋口編1978：Pl.98-40.／図5-2 水野・樋口編1978：Pl.97-46.／図5-3 水野・樋口編1978：Pl.97-31.／図5-4 水野・樋口編1978：Pl.97-55?／図5-5 水野・樋口編1978：Pl.97-11.／図5-6 水野・樋口編1978：Pl.97-63.／図5-7 水野・樋口編1978：Pl.97-40.／図5-8 水野・樋口編1978：Pl.97-64.／図5-9 水野・樋口編1978：Pl.97-81.／図5-10 水野・樋口編1978：Pl.98-43.／図5-11 水野・樋口編1978：Pl.98-18.／図5-12 水野・樋口編1978：Pl.98-17.／図5-13 水野・樋口編1978：Pl.97-3.／図5-14 水野・樋口編1978：Pl.94-9.／図5-15 水野・樋口編1978：Pl.97-27.／図5-16 水野・樋口編1978：Pl.97-50?／図5-17 水野・樋口編1978：Pl.97-4.／図5-18 水野・樋口編1978：Pl.97-74.

／図 6-1 水野編 1969 : Pl. 35-2.／図 6-2 水野編 1969 : Pl. 37-2.／図 6-3 筆者撮影 (遺物番号 319).／図 6-4 水野編 1969 : Pl. 38-7.／図 6-5 水野編 1969 : Pl. 37-4.／図 7 Dani 1965 / 66 : Pl. XIX No. 2.／図 8-1 Zwalf 1996 : fig. 8.／図 8-2 Ingholt 1957 : fig. 204.／図 8-3 Spooner 1911 : Pl. XLVI-f.／図 8-4 Spooner 1911 : Pl. XLVI-a.／図 8-5 Ingholt 1957 : fig. 296.／図 9-1 Spooner 1914 : Pl. XXII-b.／図 9-2 Spooner 1914 : Pl. XXII-c.／図 9-3 Stein 1915 : Fig. 14.／図 9-4 Stein 1915 : Fig. 10.／図 9-5 Spooner 1914 : Pl. XXII-d.／図 9-6 Stein 1915 : Fig. 9.／図 9-7 Ingholt 1957 : fig. 289.／図 10-1 Zwalf 1996 : fig. 56.／図 10-2 Zwalf 1996 : fig. 50.／図 11-1 Marshall 1951 : no. 7.／図 11-2 Marshall 1951 : no. 142.／図 11-3 Marshall 1951 : no. 158.

参考文献

- Ackermann, H. Ch. (1975) *Narrative Stone Reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert Museum in London : Catalogue and Attempt at a Stylistic History*. Rome.
- Allchin, F. R. (1972) A Cruciform Reliquary from Shaikhān Dheri. In : Pal, P. (ed) *Aspects of Indian Art. Papers Presented in a Symposium at the Los Angeles County Museum of Art, October, 1970*. Leiden, 15-26.
- Bachhofer, L. (1925) *Zur Datierung der Gandhara-Plastik*. München.
- Bachhofer, L. (1929) *Early Indian Sculpture I*. Paris.
- Bivar, A. D. (2000) A Current Position on Some Central and South Asian Chronologies. *Bulletin of Asia Institute* 14, 69-75.
- Callieri, P. (2006) Buddhist Presence in the Urban Settlements of Swāt : Second Century BCE to Fourth Century CE. In : Brancaccio, P. & K. Behrendt (eds) *Gandhāran Buddhism : Archaeology, Art and Texts*. Vancouver/ Toronto, 60-82.
- Carter, M. (2000) A Note on a Sarapis-like Bust in the Necklace of a Gandhāran Bodhisattva Sculpture in the Norton Simon Museum. In : Errington, E & Osmund Boppearachchi (eds) *Silk Road Art and Archaeology* 6, Kamakura, 9-18.
- Claridge, A. (1990) Ancient Techniques of Making Joints in Marble Statuary. In True, M. & Podany, J. (eds) *Marble. Art Historical and Scientific Perspectives on Ancient Sculpture*. Los Angeles, 135-162.
- Dani, A. H. (1965/66) *Shaikhān Dheri Excavation. Ancient Pakistan* 2.
- Dani, A. H. (ed) (1968/69) *Chakdara Fort and Gandhara Art. Ancient Pakistan* 4.
- Errington, E. (1990) Towards Clearer Attributions of Site Provenance for Some 19th Century Collections of Gandhāra Sculpture. In : Taddei, M. & P. Callieri (eds) *South Asian Archaeology 1987*. Rome, 765-81.
- Faccenna, D. (1962) *Sculptures from Sacred Area of Butkara I (Swāt W. Pakistan), Reports and Memoirs* 2(2). Istituto poligrafico dello Stato, Libreria dello Stato (Reports and memoirs, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Centro Studi e Scavi Archeologici in Asia, 2), Rome.
- Faccenna, D. (1974) Excavation of the Italian Archaeological Mission (IsMEO) in Pakistan : Some

- Problems of Gandharan Art and Architecture. In: Gafurov, B. G., et al. (eds) *Central Asia in the Kushan Period. Proceedings of the International Conference . . . held in Dushanbe 1968* 1. Moscow, 126-76.
- Faccenna, D., Callieri, P. & A. Filigenzi (2003) At the Origin of Gandharan Art: The Contribution of the IsIAO Italian Archaeological Mission in the Swat Valley Pakistan. *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 9(3), 277-380.
- Falk, H. (2001) The Yuga of Spujiddhvaja and the era of the Kusanas. *Silk Road Art and Archaeology* 7, 121-36.
- Foucher, A. (1905) *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra* 1. Paris.
- Foucher, A. (1922) *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra* 2. Paris.
- Frings, J. (ed.) (2008) *Gandhara — Das Buddhistische Erbe Pakistans. Legenden, Klöster und Paradiese*. Bonn.
- 樋口隆康 (1978) 結語 水野清一, 樋口隆康 (編) 『タレリ: ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告 1963~1967』同朋舎, 113-5.
- Ingholt, H. (1957) *Gandharan Art in Pakistan*. New York.
- 岩井俊平 (2010) カーピシー地域で出土する片岩彫刻の年代 魚津知克他 (編) 『遠古登攀』, 109-127.
- 岩井俊平 (2012) アフガニスタンの仏教遺跡群 メセ・アイナク 『佛教藝術』(毎日新聞社) 325, 69-93.
- Klimburg-Salter, D. E. (1999) From an art historical perspective: problems of chronology in the Kuṣāṇa period. In: Alram, M. And Klimburg-Salter, D. E. (eds) *Coins, Art, and Chronology: Essays on the pre-Islamic History of the Indo-Iranian Borderlands*. Vienna, 3-18.
- 栗田 功 (1988/90) 『ガンダーラ美術』 I-II. 二玄社.
- 桑山正進 (1966) Gandhāra における土器の様相 『西南アジア研究』 16, 31-52.
- 桑山正進 (1974) タキシラ 佛寺の伽藍構成 『東方學報』(京都大學人文科學研究所) 46, 327-354.
- 桑山正進 (1978) ストゥーパ方形基台の由来 オリエンツ学会 (編) 『足利惇氏博士喜寿記念オリエンツ学インド学論集』 国書刊行会, 197-212.
- 桑山正進 (2003) 佛像出現ごろのタキシラ 層位と編年 『東方學』 106, 1-20.
- Lohuizen-de Leeuw, van J. E. (1981) New Evidence with Regard to the Origin of the Buddha Image. In: Härtel, H. (ed), *South Asian Archaeology 1979*. Berlin, 377-400.
- Marshall, J. (1951) *Taxila: An Illustrated Account of Archaeological Excavations Carried out at Taxila under the Orders of the Government of India between the Years 1913 and 1934*. 3 vols. Cambridge.
- Marshall, J. (1960) *The Buddhist Art of Gandhāra: The Story of Early School, its Birth, Growth and Decline*. Cambridge.
- 宮治 昭 (2005) ガンダーラにおける最初期の仏像について 『仏教美術と歴史文化: 真鍋俊照博士還暦記念論集』 法蔵館, 5-25.
- 水野清一編 (1969) 『メハサンダ: パキスタンにおける仏教寺院の調査 1962~1967』 京都大学.

- 水野清一、樋口隆康（編）（1978）『タレリ：ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告 1963～1967』同朋舎。
- Nadiem, I. H. (2008) *Buddhist Gandhara Treasures: Taxila Museum*. Lahore.
- 内記 理（2012）スワート地方とベシヤール盆地におけるガンダーラ美術様式の年代『佛教藝術』（毎日新聞社）325, 43-68.
- 難波洋三（1986）土器についての概要 京都大学学術調査隊編『GANDHARA ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報』, 48-65.
- 難波洋三（2011）第九章 ラニガト遺跡出土土器 西川幸治（編）『ラニガト：ガンダーラ仏教遺跡の総合調査 1983-1992』第一冊本文篇（増補改訂版），京都大学学術出版会，239-40.
- 根津美術館学芸部（編）（2000）『ガンダーラの彫像』。
- Nehru, L. (1989) *Origins of the Gandhāran Style. A Study of Contributory Influences*. Delhi.
- 西川幸治（編）（1994）『ラニガト：ガンダーラ仏教遺跡の総合調査 1983-1992』第二冊図版篇，京都大学学術出版会。
- 西川幸治（編）（2011）『ラニガト：ガンダーラ仏教遺跡の総合調査 1983-1992』第一冊本文篇（増補改訂版），京都大学学術出版会。
- 小谷仲男（1978a）第四章 彫刻 水野清一、樋口隆康（編）『タレリ：ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告 1963～1967』同朋舎，50-88.
- 小谷仲男（1978b）第七章 貨幣 水野清一、樋口隆康（編）『タレリ：ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告 1963～1967』同朋舎，108-112.
- 小谷仲男（1986）出土貨幣 京都大学学術調査隊編『GANDHARA ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報』, 38-48.
- Rowland, B. Jr. (1936) A Revised Chronology of Gandhāra Sculpture. *The Art Bulletin* 18(3), New York, 387-400.
- Spooner, D. B. (1911) Excavations at Takht-i-Bāhī. *Archaeological Survey of India, Annual Report 1907-08*. Calcutta, 132-48.
- Spooner, D. B. (1914) Excavations at Sahribahlol. *Archaeological Survey of India, Annual Report 1909-10*. Calcutta, 46-62.
- Stein, M. A. (1915) Excavations at Sahri-Bahlōl. *Archaeological Survey of India, Annual Report 19011-12*. Calcutta, 95-119.
- Taddei, M. (2006) Recent Archaeological Research in Gandhāra: The New Evidence. In Brancaccio, P. & K. Behrendt (eds) *Gandhāran Buddhism: archaeology, art, texts*, Vancouver, 41-59.
- 田辺勝美（2001）ガンダーラの床几（sella curulis）に関する二、三の考察『古代オリエント博物館紀要』22, 33-62.
- 高田 修（1967）『佛像の起源』岩波書店。
- Wheeler, M. (1962) *Chārsada: A Metropolis of the North-West Frontier. Being a Report on the Excavations of 1958*. London.
- Zwalf, W. (1996) *A Catalogue of the Gandhara Sculpture in the British Museum*. London.